

令和7年度 韓国慶尚北道・嶺南大学韓国語研修プログラム

1月2月 最終報告書

広島大学 横峯果苗

ご挨拶

広島では桜も咲き始め、春の訪れを感じられる季節となりました。改めまして、広島大学教育学部教育学系コース4年の横峯果苗と申します。「令和7年度 韓国慶尚北道・嶺南大学韓国語研修プログラム」に広島県代表として参加し、嶺南大学韓国語教育院にて韓国語の学習に取り組んで参りました。2月に2級課程を修了するとともに、本プログラムを修了し、無事帰国いたしました。さて、今回は11月・12月・1月前半についての報告書を提出いたしました。今回は1月後半からプログラム修了までの大邱での暮らしについてご報告いたします。プログラム全体を通して感じ取った「生活の場としての韓国」をお伝えできれば幸いです。

報告

○嶺南大学韓国語教育院での生活

12月から在籍していた2級を、2月中旬に無事修了することができました。2級の授業がはじまった当初は、単語・文法ともに一気に難易度が上がったように感じられ、なんとか理解しようと必死に授業に参加する日々が続きました。2級での学習を続けていくなかで特に難しいと感じたのは、新しい文法に出会った際、それを訳すにあたってじっくりくる日本語が見つからない場面が増えたことでした。例えば、「-다가」という文法があります。これは動作の途中で別の出来事が起こるといった「変化」を表す文法であり、「ご飯を食べていたら電話がきた」のように行動の流れが途中で変化する様子を表します。この文法をはじめて学んだ際には、類似する文法との違いや日常生活における使い方、日本語への適切な訳し方など、当時の私にとって理解しきれない点が多くありました。このように、学習した直後には十分に咀嚼できず疑問が残る文法が増えたことは、2級の難しさであると同時に学びの面白さでもありました。

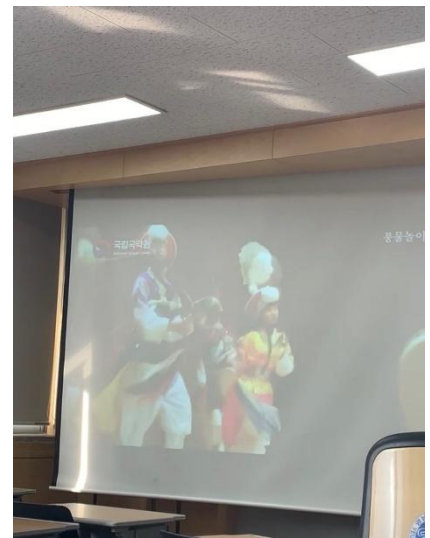
しかし、このような疑問と向き合うなかで、語学学習を進める上で大切だと感じる2つの視点を見出すことができました。一つ目は、日本語の思考では自然に生まれない文法や単語が外国語には存在するということです。理解が難しいと感じた文法は、日本語で思考する私にとって慣れない発想であり、日本語と韓国語では世界の捉え方そのものが異なるのだと気づきました。この気付きを得てからは、新しい文法を学ぶたびに新しい世界の見方を得ているように感じられ、韓国語学習の楽しさが一層深まりました。すべてを日本語に置き換えるのではなく、韓国語そのものの見方や考え方を理解し、その視点で表現することを意識して学習に取り組みました。二つ目は、すぐに理解できない単語や文法についても、会話や動画、音楽などを通して実際の使用場面に触れることで、少しずつニュアンスや使い方を身につけていけばよいということです。実際、当初は理解が難しかった文法も、学習を重ねるなかで理解が深まった経験が多くありました。また、日本語を単純に直訳するのではなく、韓国語や韓国文化ならではの考え方に基づく表現に気付く機会も増えていきました。半年間指導してくださった先生からは、「韓国語学習はマラソンのようなものです。一気に頑張りすぎても続きませんし、頑張らなさ過ぎても先に進めません。少しずつ頑張ってください」とのお言葉を頂きました。今後も韓国語学習を続けていくなかで、困難に直面することもあると思いますが、先生からの教えと自分自身の気付きを大切にしながら、自分なりのペースで楽しみながら学習を継続していきたいと考えています。

また、語学堂での生活の魅力は韓国語を学ぶことだけではありません。多様なバックグラウンドを持つ仲間たちと時間を共にし、互いに刺激を受けながら学ぶことができた点も大きな財産となりました。2級のクラスにも、国籍や文化、宗教などの異なる多様なクラスメイトが在籍しており、日々ともに学習に励みました。ここでは、そのような仲間たちと過

した印象的な日常の一部をご紹介します。一つ目は、初雪の日のクラスの様子です。クラスメイトの中には、雪が降らない地域や積雪のない地域の出身者も多く、大邱での初雪が人生で初めての雪であった学生もいました。そのため、多くの学生が喜びや驚きを見せていました。そうした様子を見た先生がクラス写真の撮影を提案してくださり、休み時間にはみんなで集合写真を撮影したり、雪だるまを作ったりして過ごしました。また、雪が初めての学生が窓際で熱心に外を眺め、それを雪に慣れている学生が教室の中から見守るといった微笑ましい光景も印象に残っています。言語や国籍、年齢の違いを超えて、雪という共通の話題を通してつながることができた時間は、非常に特別で温かいものでした。



二つ目は、韓国伝統音楽「サムルノリ(사물놀이)」を鑑賞した際の様子です。使用していた教科書はテーマごとに章が構成されており、「礼節」の章では、韓国の伝統文化について学ぶ機会がありました。そのなかで紹介されていた「サムルノリ(사물놀이)」について、先生が休憩時間に映像を見せてくださいました。初めて観賞する学生も多く、みんなスクリーンに見入っていました。鑑賞後には学生同士で母国の音楽や好きな k-pop を紹介し合うなど、にぎやかな休憩時間となりました。バックグラウンドの違いを超えて一体感を感じることでできた、文化の力を実感する印象的な時間でした。



○学校外での韓国生活

1月2月にかけては、大学の卒業論文執筆活動に注力しておりました。前回ご紹介させていただいたブックカフェ「大邱ハル」を研究対象とし、大邱ハル代表やインターン生、大邱ハル利用者へのインタビュー調査を通して、大邱ハルでの活動を通じてどのような学びが得られているのか、またその学びが対日意識にどのような影響を与えているのかについて分析を行い、卒業論文としてまとめました。ここでは、卒業論文執筆を通して得た学びについてご報告いたします。一つ目は、直接交流の重要性についてです。大邱ハルでは、日本語教室を通して日本人と韓国人が実際に交流する機会や、大邱ハル代表のように日本に精通した方と接する機会が多く設けられています。そのような環境のなかで利用者の方々は、自身の直接体験を通して対日意識を形成し、これまで抱いていた誤解を解消しながら、より合理的で多面的な理解を深めている様子が見られました。これらのことから、直接交流がもつ影響力の大きさを実感しました。二つ目は、インタビューの中で代表がおっしゃっていた「お互いにとっていい記憶に残る交流がお互いの関係の下敷きになる」という言葉です。日韓関係は時に浮き沈みの激しい側面があります。そのような状況のなかで、市民は日韓交流を通して、よりよい日韓関係の構築を目指そうとしますが、どれほどの意義があるのか、自身の活動がどのような意味を持つのかについて疑問を抱くこともありました。しかしながら代表へのインタビューを通して、国家間の課題は国家間で取り組まれるべきものである一方で、民間レベルでは緻密にお互いを理解し合う関係性を構築することが重要であり、その基盤となるのが「よい記憶に残る交流」であるという視点を獲得することができました。そして、市民はその交流の担い手として主体的に関わることができる存在であることも気づかされました。民間交流は決して無意味なもので

はなく、本プログラムもまた、互いにとってよい記憶として残る交流の一つとして大きな意義を持つ者であると再認識しました。

また、大邱ハルで出会ったみなさまには送別会も開いていただきました。半年間という短い時間ではありましたが、日本語を真剣に学び、将来へ繋げようとする参加者のみなさんの姿や、継続的に学習機会を提供し続けているインターン生や代表の姿に大きな刺激を受け、私自身も大きく成長できました。またお会いできるときまでに、さらに韓国語を高めていきたいと思います。

最後に

以上をもちまして、本プログラムでの生活を終了いたしました。ここまでお読みいただき、ありがとうございました。大邱へ渡航する前は、韓国語を学ぶことを主な目的として本プログラムに参加いたしました。しかし、実際に現地で生活を始めてみると、韓国語の学習にとどまらず、韓国・大邱での生活スタイル、多様な背景を持つ仲間との出会い、そして数多くの学びの機会に恵まれ、想像以上に多くの経験を得ることができました。そして、これらの経験は本プログラムの終了をもって完結するものではなく、今後も日韓関係に関心を持ち続け、自分にできることを考え続けていくための出発点であると考えております。今回得た経験を様々な場面で社会に還元できるよう、これからも自己研鑽に努めてまいります。私は2026年3月に大学を卒業し、4月より社会人として新たな環境に身を置くこととなります。学生時代とは異なる立場にはなりますが、本プログラムで得た学びを決して無駄にすることなく、今後の歩みに活かしていきたいと考えております。末筆ではございますが、本プログラムへの参加にあたりご支援賜りましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。皆様のみますますのご活躍を心より祈念申し上げます。

